

理 事 長 所 信



2016年度(第二年度)

一般社団法人北名古屋青年会議所



第二代 理事長
浅井 豊 司

【経歴】（法人格省略）

- | | | |
|--------|-------------------------|-------|
| 2015年度 | 北名古屋青年会議所 | [入会] |
| 2015年度 | 北名古屋青年会議所 | [理事] |
| 2015年度 | 北名古屋青年会議所 明るい豊かなまち創造委員会 | [委員長] |

理事長所信

一般社団法人北名古屋青年会議所

第二代理事長 浅井豊司

『自由闊達』

～自由闊達なる理想組織が、

自然・文化と共生するまちをつくる～

【北名古屋のまちの形】

北名古屋には特徴がない。多くの市民がアンケートでそう答える。

大都市名古屋に隣接する人口約8万人のベッドタウン。名古屋駅からわずか10分、高速道路・幹線道路が何本も走っていて、車のアクセスも良い。ほどよく自然が残っていて、住みやすい。

また、このまちには縄文時代の遺跡があり、鎌倉時代の寺社建築物も残っている。まちのあちこちで歴史・文化の薫りがする。昭和日常博物館や旧加藤家住宅など近代の歴史も大切にしている。

身近にたくさんの歴史・文化が残っているにもかかわらず、その文脈が市民に共有されていないのは残念だ。まちの歴史・文化は愛市精神を醸成する重要な財産だが、私はまだ十分に市民に知られていないように感じる。

「わたしたちは過去から学び、

今日のために生き、

未来に希望を

持たなければなりません。」

これはアインシュタインの言葉だ。未来に希望を持つために、まちの歴史・文化を学び、精一杯いまを生きよう。

【自然との共生】

特徴がないまちなどない。特徴に気づいていないだけだ。五条川、水場川、合瀬川など、水辺が多いし、田園風景も残っている。ところが、市民生活と自然環境は切り離されていて、親しみが持てないでいる。自然に対するまなざしは、まちを愛する気持ちと重なる。

いまはまだ、まちに無関心なだけかもしれない。その結果、水辺は憩いの場所になっていないし、田園風景も年々失われていく一方だ。成り行きに任せることは、市民が望まないまちの形にしてしまう恐れがある。まちの発展のあり方は市民自身がきめるべきことだ。一度つくったまちをあとから直すことは困難だ。私たちはまちづくりの担い手として、しっかりと人とまちを繋いでいく必要がある。まちの成長・発展と自然が矛盾なく共生するまちを目指したい。

【経験と想い】

一般社団法人北名古屋青年会議所は2015年に13名のチャーターメンバーによって設立された。まだ2年目の組織である。私自身は、入会后2年目で理事長の職を預かった。青年会議所の経験は少ないが、明るい豊かな社会を作るために経験年数は関係ない。むしろ、自由な発想と行動ができると信じた方が良い結果を産み出すに違いない。まちのために、自分の経験と知恵を還元したい。そんな動機から、純粹に青年会議所運動に取り組みたい。

「あなたが親切にすると、誰かは裏があると疑うでしょう。

それでも親切にきなさい。

今日善いことをしても、明日には忘れられるでしょう。

それでも善いことをきなさい。

何を与えても、十分ではないと言われるでしょう。

それでも与えなさい。」

これはマザー・テレサの言葉だ。理想主義者と言われようが、つまらないやつと言われようが、私はまちのために想いと行動を捧げたい。そんな想いを共有できる同志と力を合わせたい。経験は少なくとも、やれることはたくさんある。

【自由闊達なる理想組織】

今年度のメンバーは、私を含めて豊富な青年会議所経験を持つ者が少なく、不慣れなことにたくさん出会い、悩むだろう。そんなときは、いったんその想いを素直に受け入れよう。会議所は会議を行う場所だからこそ、会議で自由闊達に意見を交わして、みんなで答えを探そう。そして、ありがたくも支えてくださる多くの方々に相談しよう。できたばかりの小さい組織だからこそ、外部の力を借りることも大切である。

会議の格調を重んじることと自由闊達な議論をすることは両立する。メンバー一人ひとりが持っている情熱と能力を発揮するために、意識的に、学び、考え、自由に意見を交わしたい。一人ひとり価値観が違うから、意見が違うのが当たり前で、しっかりと議論した上で妥協解を慎重に積み重ねていこう。その先には、素晴らしい事業を実現する頼もしいJAYCEEとJCが姿を現すに違いない。

【守り続けたい無形資産、組織風土】

創立2年目も、いいかげんな振る舞い、不誠実な行動を決してしてはならない。初年度が築いた組織の礎はかけがえのない資産である。外部の人から見て、青年会議所はきちんとしていると思われつつけることは、大変なことだ。外部に見えているのは、私たちの内部から発露する表面だけだからだ。神は細部に宿ると言われるように、JAYCEE一人ひとりの、一つひとつの振る舞いに、組織の風土がにじみ出る。年齢制限があり、毎年人員の新陳代謝を繰り返す組織にとって、組織風土はかけがえのない無形資産だ。時間を守り、服装を整え、会議の一つひとつの所作を整えることは、活動や議論に自由さを求めるのと同じ分量で大切なことである。初年度から引き継いだ風土を10年先まで引き継いでいきたい。

【まちづくりの主役】

無関心があらゆる場面で弊害を起こしている。誰もが忙しい時代で、自分のことに精一杯で、まちのこと、未来のことに関心を持つことすら大変だ。愛の反対語は無関心と言われる。どうすれば、まちづくりの主役である市民に関心を持ってもらえるのか。私は、こう考える。

楽しいことのなかに関心が生まれる。

まちに無関心な人でも、楽しいことには参加する。音楽・造形等のアートの中に、あるいは遊びや食の中に地域を知る仕掛けを織り込めば、まちの自然、歴史・文化を発見することができる。手で触れ、体で感じ、その身体性のなかで考えることで、本質に近づくことができる。歴史・文化を感じられる環境で芸術活動・音楽活動を行えば、普段は寄り付かない場所を身近に感じられるようになる。幸いなことに私たちのまちには芸術大学がある。大学と連携すればアートのかでまちの魅力を引き出す様々な試みを実現することができる。

市民とともにこれからのまちの姿を考えたい。宅地や産業用地は大切だが、田んぼや畑も大切だ。水辺も大切だ。成り行きで増えていくものと失われていくものがあるとして、市民自身がその選択をせずに、将来失われたものを嘆くのは不幸だと思う。まちの未来を決めるのは市民一人ひとりの役目であり責任だ。だからこそ、私たちは市民一人ひとりが考える機会を積極的に創り出さなければならない。

北名古屋市民は楽しいことに敏感で参加意識が高い。市民自身がまちに関心を持ち、まちの未来を考え、主体的にまちを作っていける大きな可能性が、そこにある。その先には、地続きでこんな姿が想像できる。人と自然、人と文化が調和し、市民はそのまちに愛市精神を持っている。

【子どもたちの未来】

子どもたちの成長の勢いはいつの時代もたくましい。子どもたちの好奇心はいつの時代も力強い。ところが、大きくなるにつれて好奇心が無関心が変わっていく。未来のまちは、子どもたちが大人になった時に引き継がれるまちだ。子どもたち自身が、いまどんなまちに住んでいるのか、これからどんなまちにしたいのか、を考えることが大切だ。だからこそ、子どもたち自身がまちを感じ、まちの魅力を発見し、これからどんなまちにしたいのか、表現してほしい。想像したことは実現するから。

子どもたちは、まちの自然や文化を楽しみ、味わうことによって、まちの魅力を発見できる。田んぼ、水辺、公園など、まちのあちこちに自然がある。泥んこになって遊んだり、川遊びをしたり、公園で虫を捕まえたり、五感を使って全身で自然環境を深く味わえば、まちの自然に関心を持つことができる。自分たちの暮らすまちに好奇心が湧いて、まちに関心を持ち続けることができれば、ずっとまちに対する愛情を失うことはない。土地に根を下ろしていれば、それは心の拠り所となり、気持ちのゆとりを得ることに成功するに違いない。

【人の成長と、組織の成長】

JAYCEEは成長する。その成長の糧は、一人ひとりの思考と行動の結果として現れるものだと思う。青年会議所運動は単年度制であり、毎年皆が新しい役目を担う。効率的に成果を出すことが目的なら、同じメンバーが慣れた役目を担った方がよい。人の成長を目的とする組織だからこそ、わざわざ不慣れな役目を担うことを強いるのだ。今年度を終えた時、不慣れな担いをまっとうしたメンバーはたくましく成長しているに違いない。その過程には失敗は存在しない。思考と行動のすべてが成長につながるからだ。組織の成長は、人の成長と一致する。そして私たちの成長はまちの発展とシンクロしていく。

私たちはまちにとってなくてはならない存在になる。なぜならば、まちが好きな市民を増やす組織だからだ。市民のまちに対する関心が高まれば、一人ひとりが自分の意思でまちの未来を選択できるようになる。その意思の積み重ねこそが、明るい豊かな社会を実現する根幹である。明るい豊かな社会を追い求めることに答えはないかもしれない。でも、明るい豊かなまちは私たちの手の中にある。市民の手の中にある。私たち一人ひとりにこそ、その運命は託されている。だから、私たちには希望しかない。

【最後に】

私は一般社団法人北名古屋青年会議所のチャーターメンバーとして参加してからずっと、100年前に青年会議所運動をはじめたヘンリー・ギッセンバイヤJrのうしろ姿を見つめ続けている。初年度が始まって、私たちには何もなかった。だからこそ、かえって私たちが「持っているもの」を生身で感じることができた。100年前のヘンリーも事務所やバッチはなかっただろう。そこにあったのは「志」ひとつだけだったのではないだろうか。そうやって、私たちの活動を100年前の青年会議所の起源と重ね合わせて、自分自身を奮い立たせてきた。その気持ちはいまでも変わらない。まちとともに成長することを誓い、未踏の道を一步ずつ進んでいきたい。



Junior Chamber International **KitaNagoya**